

◇編集後記◇

本産衛誌に同梱されている JOH の 55 巻 2 号には、パレット洗浄液のテスト作業中に発生した水酸化テトラメチルアンモニウム (TMAH) による韓国における中毒死の症例報告 Tetramethylammonium Hydroxide Poisoning during a Pallet Cleaning Demonstration (Park S. H., et al., J Occup Health 2013; 55: 120-124) が掲載されています。7 年間の勤務経験がある 39 歳の男性が、2011 年 12 月 15 日に洗浄液の主要成分である TMAH 液をドラム缶から仮設洗浄槽に手作業で流し入れた際に、同液が作業服の上から上下肢にかかりました。作業者はこの状態で約 10 分間作業を継続し、約 1 時間後にシャワー室にて心肺停止状態で発見されました。TMAH による中毒死の最初の報告は、台湾から 2008 年 (投稿は 2007 年 9 月) になされています (Wu C. L., et al., J Occup Health 2008; 50: 99-102)。その後、3 例の死亡を含む 13 例の症例報告が同じく台湾より出されています (Lin C. C., et al., Clin Toxicol (Phila) 2010; 48: 213-7)。本号に掲載された韓国における TMAH による中毒死は防ぐことはできなかったのか、2008 年に Rapid Communication として本 JOH 誌に掲載された事例はその後の産業衛生にどのように活かされたのか、検証が必要であるように思われます。また、日本における TMAH の使用と安全衛生対策は、適切に

行われてきたのでしょうか。

最後に、論文の雑誌への掲載を単なる業績に終わらせてはなりません。著者は、どのようなメッセージをどのような読者に到達させたいか考える必要があります。一方編集者は、どのような読者にそのメッセージを伝えたいのか、雑誌を通して社会・科学をどのように変えていきたいのかビジョンを明確にし、実行する必要があります。また編集者は、報告された事例 (論文) について、その後の実社会、学問上へのインパクトを、単なる数値としてだけではなく、きめ細かく評価する意気込みが必要であると考えます。

2012 年に JOH 誌には 58 編の各種原稿が掲載されました。その国別内訳 (第一著者の国) は、日本 19 編、韓国、中国各 7 編、台湾 4 編であり、6 割以上を東アジアの 4 ヶ国で占めています。投稿数は採択数のおおよそ 4 倍ですので、JOH 誌がアジアの産業衛生における重要なコミュニケーションボードとなり得る (なっている) ことが伺えます。そのような現状も鑑み、本誌にどのような価値を持たせ、産業衛生の向上に繋げていくのか、読者とともに真剣に考え直す時期が訪れているのかもしれない。

(八谷 寛)

「産業衛生学雑誌」編集委員会

委員長：益島 茂 (三重大)

副委員長：樺田尚樹 (国立保健医療科学院)、杉森裕樹 (大東文化大)、高尾総司 (岡山大)、
武林 亨 (慶應大)、玉腰暁子 (北海道大)、那須民江 (中部大)、西田和子 (久留米大)、
平工雄介 (三重大)、藤野善久 (産業医大)、毛利一平 (三重大)、八谷 寛 (藤田保健衛生大)

石竹達也 (久留米大)、井上和男 (帝京大)、植嶋一宗 (津保健福祉事務所)、梅津美香 (岐阜県立看護大)、小笹晃太郎 (放射線影響研)、萱場一則 (埼玉県立大)、川口陽子 (東京医歯大)、熊谷信二 (産業医大)、黒沢洋一 (鳥取大)、近藤尚己 (東京大)、酒井一博 (労働科学研)、佐々木美奈子 (東京医療保健大)、菅沼成文 (高知大)、田中昭代 (九州大)、田中紀子 (国立国際医療研究センター)、土井由利子 (国立保健医療科学院)、中尾睦宏 (帝京大)、中村裕之 (金沢大)、馬場園明 (九州大)、原田浩二 (京都大)、東 尚弘 (東京大)、福島哲仁 (福島県立医大)、堀口兵剛 (秋田大)、丸山総一郎 (神戸親和女子大)、三木明子 (筑波大)、三宅達郎 (大阪歯大)、村田勝敬 (秋田大)、八幡勝也 (産業医大)、大和 浩 (産業医大)、吉田貴彦 (旭川医大)、渡邊博且 (産業医大)

〒160-0022 東京都新宿区新宿1丁目29番地8 公衆衛生ビル4階

電話 03-3356-1536 ファックス 03-5362-3746 振替 東京 00100-7-133495 番